

# キャリアアップ研修1【保育実践:造形】

日時：2026年4月4日(土) 9:30-12:30

会場：八尾コミュニティセンター

講師：白梅学園短期大学名誉教授 花原 幹夫 氏

内容：子どもの感性と表現を保育者がおもしろがることについて

本研修の冒頭、保育現場における造形活動の悩みを共有し、それらを解消するための糸口として4つの提案が講師より示された。①無意識に設定しているゴールから離れて、その子なりの予想外の表現をおもしろがること②造形表現への苦手意識を生む要因としての「評価」の仕方を理解すること③「ねばならない」「すべき」という固定概念から脱却すること④造形表現を、広く捉えて「ものとの出会い、行為してみること自体のおもしろさ」を大切にしてみることで、これらの視点をベースに事例紹介やワークを通して「感性」と「表現」について学んだ。

乳児も含めて子どもは本来、感じる力・表現する力をもっており、大人がその力を信頼して見守ること、そして応答することの重要性について、具体的なエピソードに触れる中で理解された。またレイチェル・カーソンの名著「センス・オブ・ワンダー」の文章引用を共有し、美しいものを美しいと感じたり、未知なものに出会い感激したりするなど、感覚や感情が動かされて、自ら「知りたい」と思う体験の大切さを改めて認識した。講師によって示された右の「循環図」は、感性と表現が単なる反復ではなく、らせん状に変化したり深まったりする様子を表している。この回転に勢いやエネルギーを与えるのが人的環境を含む周囲の環境であり、講師の述べる「大人も一緒になっておもしろがる」「子どもの感性・表現をおもしろがる」ことであると理解された。そのためには保育者自身も、自分なりの感性や表現として、自分の心の動きをもっと自由に「おもしろがる」ことが必要である。研修の締めくくりとして、グループで冒頭に共有した悩みを改めて捉え直し、学びを分かち合った。

造形に限らず、子どもたち一人ひとりの感性と表現のおもしろさを、プロセスも含めてよみとり多方面に伝えていくことが、保育者としての専門性あり、保育者それぞれの感性・表現の発揮であると考えた。

